

思い出 トランプ

向田邦子



新潮文庫

おもいで
思い出トランプ

新潮文庫



昭和五十八年五月二十五日発行
昭和五十九年六月五日刷

著者 向田邦子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

Ⓐ 印刷・大日本印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Sei Mukouda 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-129402-X C0193

新潮文庫

思い出トランプ

向田邦子 著



目

次

かわうそ	九
だらだら坂	二五
はめ殺し窓	四一
三枚肉	五七
マンハッタン	七五
犬小屋	九三
男眉	一〇九
大根の月	一二五
りんごの皮	一四一
酸っぱい家族	一五五

耳 一七二

花の名前 一五五

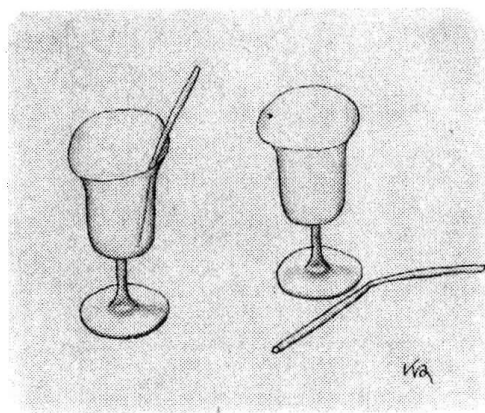
ダウト 二〇二

向田さんの芸 水上勉

カット風間完

思い出トランプ

か
わ
う
そ



指先から煙草が落ちたのは、月曜の夕方だった。

宅次は縁側に腰かけて庭を眺めながら煙草を喫い、妻の厚子は座敷で洗濯物をたたみながら、いつものはなしを蒸し返していたときである。

二百坪ばかりの庭にマンションを建てる建てないで、夫婦は意見がわかれていた。厚子是不動産屋のすすめに乗って建てるほうにまわり、宅次は停年になってからでいいじゃないかと言っていた。停年にはまだ三年あった。

植木道楽だった父親の遺したものだけに、うちは大したことないが、庭だけはちよつとしたものである。宅次は勤めが終わると真直ぐうちへ帰り、縁側に坐って一服やりながら庭を眺めるのが毎日のきまりになっていた。

暦をめくるように、季節で貌かおを変え、庭木や下草、ひっそりと立つ小さな五輪の石塔が、薄墨うすずみに溶け夜の闇に消えてゆくのを見ていると、一時間半の通勤も苦に思えなかった。文書課長という、出世コースからはずれた椅子も腹が立たなかった。おれの本物の椅子は、この縁側だという気がしていた。

厚子も夫の気持が判っているらしく、いつもは二言三言で引き下るのだが、この日は妙に

しつこかった。宅次もいつになく尖った声で、

「マンションなんか建てたら、おれは働かないよ」

と言いつ返した。

指先に挟んだ煙草が落ちたのは、そのときである。

風かな、と思った。

ふつと風にもつてゆかれた、そんな感じだった。

「風があるのかな」

宅次は呟いた。

「風なんかないでしょ。風があれば、洗濯もの、乾いてますよ」

厚子は縁側に出てくると、自分の人さし指をペロリと嘗め、蠟燭を立てるように立てて見せた。

「風なんかありませんよ」

九つ年下の厚子は、子供のいないせいもあるのだろう、年に似合わぬいたずらっぽいしぐさをするところがある。西瓜の種子みたいに小さいが黒光りする目が、自分の趣向を面白がって躍っているのを見ると、宅次は煙草のことを言い出すのが億劫になった。

中年。手足のしびれ感。何という薬の広告だったか、こんな文句があったと思ひながら、沓脱の石の上で細い煙を上げている煙草を拾った。手袋をはめたまま物を掴むような厚ぼつ

たい感じがすこし気になった。

あとから考えれば、これが最初の前触れだった。

この何日あとだったか、仕事集中不意に目の前にいる次長の名前が思い出せなくなった。その日だったか次の日か、つきあいで酒を飲み、送りのタクシーで帰ったとき、車から降りたとともに、糸の切れた操り人形のようにくたくなり、地面に坐り込んでしまった。運転手に助け起されてすぐに直ったが、あれも前兆だったのである。

指先の煙草を落してから一週間目に、宅次は起きぬけに朝刊を取りにゆき、茶の間へもどったところで、障子の棧につかまりながら、わからなくなった。

脳卒中の発作だった。

頭のなかで地虫が鳴いている。

倒れてからひと月になるが、地虫は宅次の頭の、ちょうど首のうしろあたりで、じじ、じじ、と思ひ出したように鳴いていた。

意識が薄れたのは、ほんの一時間ほどだったが、それでも右半身に軽い麻痺が残った。杖にすがればどうにか歩けるが、右手はまだ箸が覚束なかった。

厚子が鼻唄を歌っている。

宅次が倒れてから、厚子はよく鼻唄を歌うようになった。病氣は大したことないのよ。そ

のうち、きつとよくなるわよ。あたし、決して悲観なんかしていないわよ。そういう代りに鼻唄を歌っているように見えた。

もともと、こまめなたちだったが、宅次が会社を休職して、寝たり起きたりになると、厚子は前にも増して、よく体を動かした。坐っているとときは、豆の莢をむいたりレースを編んだり何かしら手を動かしていた。することがない時でも、目玉だけはいつも動いていた。

玄関に人の来た気配がする。車のセールスマンらしい。主人が倒れたので車どころじゃないのよ、と言いかたと耳をすますと、

「ごめんなさいね。うちの主人、車のほうなの」

歌うような厚子の声が聞えた。

そうだ。厚子はいつもこのやりかただった。

化粧品セールスだと、主人は化粧品関係になったし、百科辞典がくると出版関係になった。新婚の頃、毛布を売りにきた押売りを、

「うちの主人、繊維関係なのよ」

歌うような口振りで追い払い、奥にいた宅次を振り返って、目だけで笑ってみせた。面白い女と一緒にあった、一生退屈しないだろうと宅次は思ったが、その通りだった。

嘘も方便という程度の他愛ない嘘をつくとき、歌うような声になるのを一緒に面白がっている分には、気働きはあるし情も濃い。宅次には過ぎた女房といえるだろう。その嘘にして

も、つまりは宅次のためうちのため役に立つ頓智の領分だった。

顔の幅だけ襖すきがあいて、厚子が顔を出した。

二十年前と同じ笑い顔だった。指でつまんだような小さな鼻は、笑うと上を向いた。それでも離れている目は、ますます離れて、おどけてみえた。何かに似ている、と思ったが、思い出せなかった。病気のせいか、脳味噌のほうも半分分厚い半透明のビニールをかぶったように焦じれたくなる。

こういうとき、頭のなかの地虫は、じじ、じじ、と鳴くのである。

厚子は赤いクリーム・ソーダを飲んでいる。いい年をして、ストローをぶくぶく吹くものだから、アイスクリームのまざった赤く色のついたソーダ水は、白いあぶくが立っている。厚子のくわえているストローは、縦にひび割れていたらしい。割れ目から、赤いソーダ水が溢あふれてきた。

「よせ。吸うのはよせ」

今度血管から血が溢れたら、おれは一巻の終りだ。

叫こゑぼうとするのだが声が出ない、というところで揺り起された。

夢かうつつか。つなぎ目がはつきりしなくなっている。新婚の頃、デパートの食堂で、ソーダ水を飲んでいて、厚子のストローがひび割れて、いきなりソーダ水があふれてきたこと

があつたような気がするが、色は赤だったか青だったのか。

厚子は、いつの間に着替えたのか、よそゆきの着物を着て、布団のすぐ横に坐っていた。「この間から、話してたあれ、出かけて来ますね」

あれと言われても、とっさには思い当らない。

高校のときの先生が、勲章をもらった。同窓会でお祝いを上げることになったので幹事だけでデパートへ下見にゆくというのだが、そんなはなしは初耳のような気がする。

「お三時はメロン冷えてるけど、帰ってからでいいでしょ」

厚子は、着やせのするたちだが、脚の太いのを気にして、気の張る外出はいつも和服である。それはいいのだが、相手によって衿元えりもとが二段階に分かれていることに、宅次は前から気がついていた。

宅次や親戚しんせきの女たちと出かけるときは、格別胸元を取りつくろうことをしないが、よく見られたいときは、胸をぐっと押上げるような着付けをする。

細い夏蜜柑なつみかんの木に、よく生なったものだと思うほど重たそうな夏蜜柑が実っているのがある。結婚した当座の厚子はそんな風だった。さすがに四十を越して夏蜜柑も幾分小さめになったようだが、ここ一番というときになると、厚子は上に持ち上げて、昔の夏蜜柑にするのである。

これから逢う相手は女ではないような気もするが、この病気の特徴は、ひがみっぽくなる